

都立駒込病院に心身医療科（心療内科）を
存続させることに関する要望書

住所

氏名 大塚 敦子

電話 3813-1997

外 名

要旨

- 一、都立駒込病院から心身医療科をなくさないで下さい。
- 二、今まで通り毛塚満男先生を常勤のままにして下さい。

理由

一、病院は誰のためにあるのでしょうか。

もちろん、患者のためでしょう。しかし、私たち患者は、病院側から心身医療科に常勤医がなくなることを何も知らされておりませんでした。

他の科とは著しく性質の違う心身医療科です。唯お一人の常勤医の毛塚先生は、患者の不安シヨックを少しでもやわらげるため、「四月以降患者さんを見られなくなることがあるかもしれない。」「今までのように常勤医がいなくなるかもしれない。」とだけもらされました。早く耳にした者でも一月の末のことです。このような大事を、病院、行政サイドだけで、ごく短期間に決定することは、著しく私たち患者の病状を悪化させることになります。

一部の患者にとっては、命取りとなることもおおいにあります。

二、非常勤医だけにすることは、心身医療科をなくすことになる。

病院側は非常勤で対応していくとお考えのようです。病院側が、このような決定をしようとする
こと自体が、正に心身医療科への認識がこのようなものだったのかと患者一同悲嘆にくれる次第で
す。

当然のことですが、非常勤の先生だと、今までのように、病気を抱えながら社会で活動す
る人間たちへの、緊急かつ細やかな病状の変化に対応していただけなくなります。

手当の薄い、身分保証も常勤とは格段に違う非常勤の先生方は長期にわたって勤務していただ
けないのは、火を見るより明らかです。(他の施設でのそのような事例は多々あります。)

これでは、何年も通院する患者がいる心身医療科が近い将来なくなることになります。それが病
院側の本当のねらいなのではと、疑念を持って当然だと思います。

三、精神科があれば心身医療科はいらないと考える人がいるようです。

心身医療科と精神科は違うと思います。

この度の不幸な阪神大震災の際でも、NHKのニュースの解説では一日とおかず、被災者の方のメンタルケアの大切さを取り上げていました。小児精神学会も時を置かず子供たちの精神状態のために、会を開き連絡協議をしていました。

たとえば、読売新聞の人生相談にも、回答者に慶応の保崎秀夫先生が加わる時代です。このような例を上げたら枚挙にいとまがありません。

心の時代と言われながら種々の心身の不調、病気が増加し、その病気にも多様なものが出てきています。

一方で街には精神ケアを銘打って多額の金銭を要求する施設も多くある世の中です。心のケア施設はますます重要になっていくと思われれます。

そのような状況の中で、精神科の先生の中にもいろいろのお考えの違いがあり治療の方法にも差があると聞きます。薬物治療だけに重点をおく方、心のありように手だてをこうじて下さる方、いろいろだと聞きます。そして、患者の中には多くの精神科を渡り歩いて当病院にたどり着いた者もいます。

この様に現代では、心を病む者も多様であり、当然精神科でもなく内科でもないという、境界事例の患者さんがたくさんいると思えます（日本では、心を病むことを恥とする風潮があり、時代が

進めば実質的な患者数はもっと増加するでしょう。)

先に挙げた保崎先生も紙上で、病状にあわせて精神科や、心療内科などに気軽に行ってください、とよく答えておられます。

当病院では、診察室も内科や小児科の近くに目立たぬよう配慮され、その診察も他と違い、治療の方法も独自のものがあります。病状にあわせて時間的にも余裕を持たせて下さっています。心身医療科は駒込病院の独自性をまさに体現していると思います。

心身医療科は精神科があれば不要などと考えないで下さい。

四、患者が本当に困っています。

・非常勤の先生に担当され先生が次々に替わり病状を悪化させた者がおります。

・心身医療科とは、医者との信頼関係が生まれて初めて治療の効果が出る所だと思えます。

・当科にかかる患者は、人目を避け職場でも病気を内密にしている者もおります。その点で特別の配慮のある心身医療科がなくなると患者は苦しみのどん底に陥れます。

・患者は長期にわたり通院している者が多いです。(二十年近くになろうとする人がいます。)

心の安定にも同じ先生に今後も見てもらうことが何より必要です。

・薬物治療と精神療法を加えた独自の治療で救われた者が多くいます。常勤の先生がいらっしゃらなくなればそれも不可能となります。不安です。

・今までも突然病院に連絡を入れ、薬物の投与をしていたり、精神的混乱の対処を教えただいたりした例があります。非常勤の体制ではそれは不可能です。

・緊急を要する病状が心身医療科にもあります。常勤の先生はぜひ必要です。その為に病院の近くに引越しをしてきた患者もいます。

・他の病院で相手にされず、ここ駒込病院で安定を得た患者もいます。今後どこに行けばよいのでしょうか。

五、赤字の補填を弱者にしわ寄せするのが人に優しい都の行政でしょうか。

住民は短期の利益を追い、行政は長期の利益を考えて施策しようとするために、とにかく利害が対立すると言われています。しかし、これはまるで正反対ではないでしょうか。

これから、境界的な、精神科と内科をつなぐ医療がますます必要になる時代に（特に精神を病む病気に偏見の強い日本の現状では、）これでは、逆行します。このことは、行政の本当の先見性が問われているともいえるのではないでしょうか。

短期の利益のみを追うのはどちらでしょうか。よくお考えいただきたいと思います。

民間でできぬことをするのが公立病院の役目と考えます。本当に人に優しい福祉政策をとられるなら赤字の補填を単に医師の数として考えるだけでなく、今まで申し述べた内容から判断していただかないと、赤字をなくすという名目で弱い者いじめをしていることになると思います。

六、都立駒込だからこそ・・・

都立駒込病院は感染症を始め高度の医療の先端をいく病院と伺っています。今まで私たちに接して下さる病院の方々は文字どおり、それを実践して下さいました。心身医療においても拒食症を始め現代の病状に多く応じて、実績を上げてこられたと信頼しております。感謝しております。その先進的な病院から、心身医療科が消えてなくなることにつながる常勤医廃止はどうしても納得がいきません。

赤字を何とか解消しようとするご努力も分かりますが、それは患者に向けられることではなく、医療費制度や、他の病院経営など、他に向けて考えられることではないでしょうか。深いご賢察をもって、真のリストラをお願いしたいと思います。

追記

先にも申しましたが、日頃、表に出ることをはばかる者たちが千余りの署名を集めました。気持ちを酌みとりいただくと同時に氏名の公表などはご勘弁下さい。

私たちは、患者独自の要望を出しております。病院内部の方と画して行動しております。その点は、誤解の内容にお願いいたします。

平成七年二月〇日

東京都知事 鈴木俊一殿

都職労駒込分会 委員長殿

都立駒込病院 医学会議議長殿